

# フェミニスト地理学の射程と課題

寄藤 晶子

## Perspectives and Issues of Feminist Geography

YORIFUJI Akiko

### 要 旨

「女性」を描くことから出発したフェミニスト地理学は生産／再生産、公的／私的という二元論的知が世界を構成し、「男性」ですら排除や抑圧の対象となることを示した。ジェンダーは歴史・地理的な状況を通して再生産され、その過程では道徳的言説を伴う差異の空間を弁証法的に構築する。規範的な「男性」像を作り出す過程と空間の関係を分析するには、規範を脅かすものとして表象される空間・場所に対する道徳的言説と排除の地理にも注目する必要がある。

### キーワード

ジェンダー 「男性」の構築 排除の地理

### 目 次

- I. ジェンダー概念と地理学
    - 1) 女性運動とジェンダー概念
    - 2) フェミニスト地理学の誕生
  - II. 英語圏諸国のフェミニスト地理学における排除と抑圧の地理
    - 1) 関係性としての空間・場所、可変的なジェンダー
    - 2) ジェンダーをめぐる排除と抑圧の地理
  - III. 日本のフェミニスト地理学における視点と課題
    - 1) 権力関係への接近
    - 2) 場所をめぐる表象と周囲からのまなざし
    - 3) 「男性」にとっての空間の意味
  - IV. 「男性」を構築する差異の空間にむけて
- 謝辞  
参考文献

## I. ジェンダー概念と地理学

### 1) 女性運動とジェンダー概念

19世紀半ばにイギリスとアメリカで起こった女性の権利獲得運動は、選挙権、財産所有の法的権利、そして教育と就業の機会の獲得を目指し、一定の結果を残した。その後、1960年代後半に花開いた女性への関心は第2波フェミニズムと位置づけられ、男/女の差異の問題や女性身体と表象をめぐるテーマに取り組んだ(ビルチャー・ウィラハン2009)。なかでも、1949年に刊行されたボーボワールの「第二の性」は、いかにして歴史的に「女になる」のか、「女が作られるのか」という地平への注目を喚起した(Jackson 2005)。

「いかにして」という問いが登場するまで、男/女という性別はあたかも自然なものとして語られてきた。この自然化された「男/女」の存在は、前者(男)を文化的存在、後者(女)を自然に近い存在として分類してきた。女性は出産を中心とした生理的機能をもつがゆえに、自然に近いという社会的文脈に閉じ込められてしまう(Ortner 1996)。このため、社会的で公的なものごとを取り扱うのが男の仕事とされ、男性は人間の基準と位置づけられた。一方の女性は、基準となる男性との差異によって解釈され、男性よりは「劣る」という意味が付与されてきた。

こうした、男性優位の序列化を批判し、乗り越えるために登場したのが、ジェンダーという概念である。まず、最初のジェンダー概念では、性の形態を男/女の二項対立的枠組を下敷きにしなが、性を生物学的なもの、文化的に後天的につくられるものとの分離した。この概念の創造によって、男以外のもの(すなわち女)が「生物学的」に宿命視されてきた性別役割分業を、似非科学として否定することが可能となった。ジェンダー概念は男性に対して女性を劣ったものとみなす意識を、男性中心主義だという視座を社会に突きつけ、これを批判したのである<sup>1</sup>。

社会化され、作られた存在として人間像を提示したジェンダー概念の登場は、人種や宗教を用いた差別からの解放を求める市民運動とつながり、自明視されていた認識を改めるように学問領域へもせまった。これを、広義のラディカル社会科学運動に含めることもできる。いずれにしても、ジェンダーに関わる研究の展開は、欧米圏の地理学にフェミニスト地理学という立場と新たな視点を浸透させていった<sup>2</sup>。

### 2) フェミニスト地理学の誕生

フェミニスト地理学は空間とジェンダーの関わりを追求した。古典的な社会契約論以降、

---

<sup>1</sup> たとえば、そのセンセーショナルな著書(原著は1970年刊行)において、性というものが、政治的含み-すなわち一群の人間が他の一群の人間に支配される仕組みをもつ、ひとつの地位カテゴリーであることを強調したケイト・ミレットは、男女両性間の区別が文化的なものであると記した。「…不幸なことに、男女両集団を区別する心理・社会的区別は、両者の現在の政治的関係を正当化するとされているが、その区別は自然科学でいう明瞭、明確、測定可能、かつニュートラルな区別ではなく、全くちがった性格のもの-漠然とした、不定形な、用語の上ではしばしば疑似宗教的ですからある-である。したがって、地位についてはいわずもがな、役割や気質というもっと重要な領域において両性間にあると一般に了解されている区別の多くは、実際上、生物学的というよりも、本質的に文化的基盤に立つものであることが認められなければならない。」(ミレット1991: 77)

<sup>2</sup> 研究者の男女の区別なく、ジェンダーから生ずる権力性に特に自覚的であり、かつその知見を通じて男/女の権力関係の改変を目指していこうとする立場をとる(木村2008)。

社会は公的で政治的な領域と、私的で政治とは乖離した領域によって構成されるという思想が西欧近代社会を形成してきたが、公的領域は市民としてふさわしい能力をもつ男性の領域として、私的領域は女性と子どもの領域と位置づけられてきた(ビルチャー・ウィラハン2009)。このため、公的領域だけが学問の対象となるべきものとして取り扱われ、政治的ではないと価値付けをされた人々による私的領域は、学問領域や社会的議論から放置されるか、存在しないものとして無視されてきた。

フェミニスト地理学は、こうして空白にされた領域を可視化することから出発していった。なかでも、地理的空間において「女性」がいかに制約を受けているのかを分析し、「女性」の存在を可視化することがフェミニスト地理学の初期の重要な論点となった。こうした研究は総称して「女性の地理学」(Pratt 2000)と位置づけられ、公的領域から排除された女性の不平等や、男性への従属の程度を検討する地理学研究が1980年代を通じて蓄積された(マクドゥエル1998a)。

1990年代に入ると、フェミニズム理論の内部で大きな論争がわき起こった。それは、「女性」の不平等を主張することが、単一の「女」カテゴリーの自明化につながるという批判である。バトラー(1999)は、女というカテゴリーを首尾一貫した安定した主体として構築することが、ジェンダー関係を無意識に規定し、物象化してしまうと主張し、大きな議論をよんだ。

これまで語られることのなかった女性の存在を描き出し強調することが、かえって男／女という二元論的思想とその役割を歴史的に補強することにつながるという指摘は歴史学でもなされた。スコットは、女についての主題が他の伝統に接ぎ木されるか、あるいはそうした伝統からは孤立したところで研究されてきたと述べた。女たちに焦点を当てることは、「歴史に補填する」ことだけではなく「歴史を書き直す」ことでもあるべきだと歴史学における方法論上の見直しを主張した。そして、ジェンダーを「肉体的差異に意味を付与する知」であり、「それ自体が説明を必要とする一つの可変的な社会的組織」だと定義し、知の産出に関わる歴史学の方法に疑問を呈した(スコット1992)。

また、コンネルは男性または女性であることは固定された状態ではなく、そのようになることだと主張した。男性や女性になるということを構築と捉え、これが外部からの強制ではなく日常生活での振る舞い方を通してなされるとする。つまり、ジェンダーとは身体や生殖の区別を社会的に位置づけていく実践であると指摘した(コンネル2008)。

バトラーやスコット、コンネルなど様々な論者によるジェンダー概念の捉え直しが、ポスト構造主義的な手法と新たな認識枠組みを練り上げるなか、フェミニスト地理学も変化していった。フンボルトを「生みの親」とする地理学の方法論－徹底した記録や地図化、実証主義－には、絶対的な位置から、相手への断りもなく勝手に一方的な視線や関心に向けてそれを行う、という白人男性の覇権主義的知があることが指摘されていった。それと同時に、学会制度内の女性抑圧も議論の対象となり、女性が地理学的知の生産者として周縁に位置づけられ、学会制度から排除されてきたことが論じられた(ローズ2001)。

こうして、地理学的知の概念が人類の半分を排除した制度のうで男性中心に生産され、展開してきたこと、そこには合理的主体としての男性と、女性化された「他者」という序列化された二元論が連綿と刷り込まれてきたことなどが明るみに出されたのである(モンク・ハンソン2002)。

本論では、こうして誕生した英語圏諸国のフェミニスト地理学研究のなかでも排除や抑圧を扱った論考を取り上げ(Ⅱ)、ジェンダーと空間の関連について要点を整理する。次に日本のフェミニスト地理学における視点と課題を検討し(Ⅲ)、「男性」というジェンダーの構築を考えるうえで道徳的言説と排除の地理を無視できないことを述べる(Ⅳ)。

## Ⅱ. 英語圏諸国のフェミニスト地理学における排除と抑圧の地理

### 1) 関係性としての空間・場所、可変的なジェンダー

日常的な活動や実践においてジェンダーはどのように作られているのだろうか。「諸身体間の生殖上の区別を社会過程に関連づける一連の実践」(コンネル)と空間・場所とはいかなる関係にあるのだろうか。スコットの言葉を借りるならば、「どのようにして」を強調することは、起源ではなく過程について、単一ではなく多数の原因について、イデオロギーや意識ではなくレトリックや言説について研究することを意味している(スコット1992: 20)。

ここにおいて、日常の活動がいとまれる個別具体的な「場」における政治(ポリティクス)とジェンダー関係を検討してきた英語圏諸国のフェミニスト地理学の研究に注目する必要がある。フェミニスト地理学者たちは、既存の地理学を含む諸科学の認識論が二元論を前提に構築されており、この二元論的思考が多様な日常実践において再生産されていることを明らかにするとともに、この二元論を乗り越えるために“空間”や“場所”を社会的諸関係、社会プロセスとして捉える視座を提示していたからである(石塚2010)。

その代表的な論者のひとりドリーン・マッシイは、空間がある絶対的な(すでに存在するものの)次元ではなく、社会現象の諸関係から現実的に作り出された一つの結果であるとの概念的前提にたつ。そして、1960年代から1980年代のイギリスにおいて実施された経済政策と政治戦略によって、特定の種類の女性労働力が「開発地域」の労働市場に出現し、その出現自体が地域的に特殊なジェンダー関係の領域を形成したことを明らかにした(マッシイ2000)。

マッシイは、対象となった時期を通じて、ジェンダーがイギリスの経済空間の組織化とその再編の本質的な要素であったと指摘し、「それゆえ、ジェンダーと地理はこの時期を通じた雇用の再構成において不可欠なものであり、ジェンダーはそこで起こった地理的な再編成にとっても不可分のものであった」(マッシイ2000: 309)と論じた。つまり、賃労働における分業とジェンダーの関係に自然な要素はひとつもなく、すべて社会的に形作られたものなのである。

フェミニスト地理学者たちはこのように、ジェンダーをその位置や状況、時代や場所において変化する、部分的で状況づけられた知(situated knowledge)と捉え、ジェンダーの差異と場所との関係性を理論化する道を開拓してきた(マクドゥエル1998b)。そして、場所がジェンダー的、性的、身体的アイデンティティの生産と再生産にとって重要な役割を担っていることや、そこにおいて排除と抑圧の地理が展開することを明らかにしている。

### 2) ジェンダーをめぐる排除と抑圧の地理

異性愛を当たり前のことだとみなす意識もまた、ジェンダーに関わる排除や抑圧の地理

の産物である。ジル・バレンタインは、異性愛が私的空間における性行為によってのみ定義されると想定するのはあまりにナイーブだとして、私的空間外における非異性愛への排除と抑圧の構図を示した(バレンタイン1998)。

バレンタインによると、住宅、家庭、職場、社会空間、公共空間といった日常空間には異性愛を自然とみなす意識が充満し、同性愛は恥辱的否定的なものとして位置づけられてしまう。偏見からくる暴力や嫌悪のまなざしから逃れるために、同性愛の当事者は自分たちの安全な場所を作るが、それはその場所へ閉じこもる傾向もあろう。排除や抑圧の実践とこれに対する当事者の対抗手段が、結果として日常空間の異性愛化を強化し再生産するという皮肉な結果を招いてしまう。こうして、日常空間においては、同性愛者のライフスタイルが排除され、異性愛を正常とみなし優位におく関係性が再生産されるのである。つまり、異性愛は大部分の日常的環境のなかで作用している権力関係の一過程であり、それは個別の場所を通して生産され、補強されるのである(バレンタイン1998)。

公共空間もまた、ジェンダーに関連した権力が支配している。フィル・ハバードは、ジェンダーや性行為に関する道徳的な表象が動員されることによって、売買春の空間に対するイメージが「不道徳なもの」とされ、商売を行う者(この場合は女性たち)が公共空間から排除されていく過程を描き出した(ハバード2002)。

現代西欧社会において性行為は、家庭という場で定まった異性愛カップルの間でなされる事柄であって、私的空間に属するべきこととみなされている。しかし、売買春は、公的空間において定まらない相手との交渉の結果取り結ばれる行為であり、その行為者や空間の存在は、公私二元論的な道徳観と空間構成を脅かす。いわば、路上に出現する売買春行為あるいは交渉の場は、みだらで危険でブルジョア社会に対する脅威となる。その結果、本来あるべき(理想の)都市の姿を汚すという意味で、売買春および売春婦は不道徳であるという言説がうみだされ、その表象が空間をめぐる争いに作用していくことになる。

道徳的言説とジェンダーとがせめぎあいながら、さまざまな「逸脱者」をつくりあげ、その者たちを公共空間から排除しようとするプロセスは、多数派集団の趨勢に加担する。これらのプロセスは、特定の地理的コンテクストにおいて構築されることで、都市空間の秩序を再生産しているのである。

都市空間には、特定の社会集団に対する排除の実践が底流している。非定住型の生活をおくるマイノリティに対する排除の社会-空間的プロセスを研究するDavid Sibleyは、精神分析を応用させ、一つの空間内に所属する(べきな)のは誰かという意識を検討しながら、異なる空間スケールにおいて発動する排除のシステム、つまり個人や社会集団を排除・周縁化し「他者」化するプロセスを分析する(Sibley1992、1995)。

その方法については、差異の構造を超歴史的・超文化的に位置づけ、自己と他者に関する社会や文化ごとの思想を普遍主義的に断じてしまっているという批判もある。しかし、純粋に対しての「不浄・汚れたもの」という身体イメージや、ノーマルに対しての「逸脱」、同質性に対しての「他者」といった表象とジェンダーが、空間的排除へとつながり、日常的に作動することを明らかにしている。

たとえば、ショッピングセンターは若者のサブカルチャーにとって便利な出会いの場であるが、彼女ら彼らは、運営会社および警備会社の排除の対象となる。それは、若者たちが社会カテゴリーとしての「若い男性」だとか、「若い手に負えない連中」だからというわけ

ではなく、普通の家族のための空間として構成されているところに彼らが存在することそのものが矛盾と脅威の原因になるからだという。

管理室の見えないところには、民間警備会社に雇われてセンター内を警備する人々がいた。彼らの目はテレビ画面に固定されていた。警備員たちは「好ましくない奴ら」を探していたのである。「好ましくない奴ら」は多くが10代の少年グループで、会社が提示する家族イメージにそぐわない存在であった。少年らがいるのを見つけると、警備員らは建物の中からだけでなく構内からも立ち退かせた。このような行動は、ショッピングセンターには二重の性格があるという一つの事実を示している。つまり、見かけでは公共であるのに実際には私的空間だという多義性である。他者を抑圧するようなやり方で社会と空間を組織していく建造形態には、包摂と排除に関する暗黙のルールが存在している。(Sibley1995: xi)筆者訳

こうした分析を通じて、ジェンダー的、性的、身体的アイデンティティの生産と再生産にとって、都市空間の秩序を維持しようとする排除や抑圧の実践が大きく関わっていることと、その実践に道徳的言説が組み込まれていることが確認された<sup>3</sup>。

生み出される社会的差異はつねに空間化される。その空間化のプロセスでは、ジェンダーや身体イメージが参照され、道徳的言説による意味づけを伴いながら、ジェンダーは補強・修正される。ジェンダーという「社会関係の構造」は、負の身体イメージや道徳的言説が空間イメージと複雑に絡み合うことによって作り出されている。そして、それは特定の空間・場所をめぐる立ち上がるときに、同時に補強・修正され、再生産されているのである。

### Ⅲ. 日本のフェミニスト地理学における視点と課題

#### 1) 権力関係への接近

それでは、日本<sup>4</sup>のフェミニスト地理学はこのような視点の研究を行ってきたのだろうか？

そもそも、英語圏諸国に比べて、日本ではフェミニスト地理学研究は少ない。早くから学会内部での男女不均衡や「役割」の自明視に疑問と批判を加え、「女性がいらない日本の地理学会」へ警鐘をならしていた研究者も存在したが、社会的議論としてのフェミニズムないしフェミニスト地理学の日本への影響はいまだに限定的である(村田2009)。たとえば、次のような太田勇の主張は20年以上たった今日でも問題の本質を突いており、学問分野に限らず広く共有されるべき内容を含んでいる。少し長くなるが引用しておきたい。

「(日本でよくいわれる)“女性の視点”は、社会に不公正をもたらす原理を矮小化して説明する危険をはらんでいる。・・・(たとえば)アメリカの公民権運動に参加した白人は、“黒人の視点”に立ったのではなく、人権という普遍的な思想を理解した

<sup>3</sup> moral geographies(道徳地理学)には、人間とその環境が道徳的な価値判断(評価)を生産し、生み出された道徳性は人間と環境に反映される、という環境決定論的視座が流れている(Matless1994)。

<sup>4</sup> 日本語を母語とする研究者による、主に日本語で書かれた論文を意味する。

のであった。欧米に現れている男性のジェンダー地理学研究者も、“女性の視点”に共鳴したのではなく、もっと普遍的な発想から研究テーマを見つけたはずである。・・・フェミニズムは女性のためだけの社会改革を目指してはいない。“女性の視点”ではないのである。」(太田1991<sup>5</sup>: 23)

さて、日本の地理学のなかで、女性に注目するという意味の研究が行われてこなかったわけではない。しかし、影山穂波は女性に注目した日本の地理学研究が単に性差を提示したにすぎず、女性のみならず男性にも言及してきたと指摘する。そして、こうした研究群が、性別役割分業を自明視し、性が社会的に構築されるものであるという考えを持っていないことに加え、現象を提示することに終始し、根源的要因や権力関係に迫るものが少なかったと断じた(影山2002)。また、初期の研究における傾向として、生産活動と再生産活動を明確に区別したうえで個別のテーマとしてアプローチするものが多く、この二項の関係性にまで踏み込むものは少なかったと言う指摘もある(木村2008)。

1990年代以降の研究では、フェミニスト地理学的立場、つまりジェンダー関係を権力関係と捉える視座を持ち、資本主義と生産／再生産の共犯関係を視野に入れた研究が蓄積されつつある。たとえば、欧米圏での議論を紹介し、日本のフェミニスト地理学を牽引してきたひとりである吉田容子は、大都市郊外ニュータウンの出現により、生産活動の場である公的空間と、再生産の場である私的空間が都市と郊外に完全に分断された結果、男性は公的空間で賃労働、女性は私的空間でアンペイド・ワーク(無賃労働)という性別役割分業が空間に固定されたという。そして、都市の財や資源へのアクセスに性差による不平等が生じているとして、ジェンダー関係は空間に現れた一種の権力関係であり、二元論的イデオロギーによって強固に支えられていると論じた(吉田2002、2006)。

また、都市空間研究にジェンダー視点の必要性を主張した影山は、居住空間(建物である住宅を基盤にして生活行動が展開される空間)概念を用いた一連の研究において、近代の都市空間が、ジェンダー化されてきたことを示す。すなわち、産業革命後、賃金労働の場と家庭が分離したことによって、家庭は安息のための場所や労働力の再生産の空間へと性格を変えていった。この空間を維持する役割が女性の責務とされた結果、家庭を女性の場として、職場を男性の場とする性別役割分業が空間的に明確に分化した(影山2004)。木村(2006、2009)は、こうしてジェンダー化された再生産の空間のなかに参入する賃金労働からの退職男性が、自己の役割やアイデンティティを再獲得していく状況を「男性性」の再構築という観点から分析する。

このように、日本においてジェンダーを権力関係と捉える視点での地理学研究は近年活発になる傾向にある。しかし、特定の地理的コンテクストにおける道徳的言説や表象とジェンダーの交錯に注目する研究はあまり多くない<sup>6</sup>。

<sup>5</sup> これについては熊谷(1991)が、絶対的少数派として存在が無視されるという差別的現状がある以上、「女性」という固有の視点があるという前提での活動には一定の意義が認められるという「反論」も提示した。「女性」の管理職や雇用者数を瞬間的に増加させればよしとするような考え方は間違っているが、ジェンダーバランスという観点でアフォーメティブ・アクションを実行していくことは重要だと筆者も考える。太田の指摘は、ジェンダーバランスという考え方そのものが過去の遺物になることを待っている。

<sup>6</sup> たとえば、吉田(2006)は、軍事基地の建設が本格化した1950年代の沖縄で米兵相手につくられた特設街にみられるジェンダー関係を、阿部(2003)は愛知県名古屋市栄のフィリピン・バブ空間での「エスニシティ」をめぐる表象を論じている。

## 2) 場所をめぐる表象と周囲からのまなざし

特定の場所と「女性」イメージとがいかに相互に影響しあっているかを描き出したものとして松井美枝(2000)があげられる。松井は、近代女性労働史で、紡績工場の寄宿舎に収容された農村出身の未婚女性が、低賃金の長時間労働を強いられている悲惨な姿として描かれることが多い点を疑問視し、悪辣な会社と無力で哀れな被搾取者である「女工」といった固定的な言説こそが、紡績女性労働者の主体性とエネルギーを無視し隠蔽するものであったと主張する。そして、紡績女性寄宿労働者に対する社会からの蔑視や偏見を提示し、その生成の背景について考察するとともに、地域社会からの差別が労働者に与えた影響や、社会的偏見に対する労働者の意義申し立てを描き出した。

松井の論考のなかでも注目すべき点は、一面的社会イメージによる偏見あるいは蔑視も、当時代における紡績女性労働者の実際の労働・生活環境を構成している重要な要素であったと位置づけている点である。一面的「女工」イメージのなかで、女性労働者らは、東洋紡績神崎工場周辺の地域に意味を加えていった主体であって、けっして「まなざされ」たり、語られたりするだけの客体ではないのである。

蔑視やさげすみといった視線をはねのけ、自尊心を維持するために当事者が行うふるまいが、回り回ってジェンダーに関わる既存の社会秩序の再生産に関連したり<sup>7</sup>、逆にそれを修正するという視点は影山(2000)にも見られる。大正末期に急増した「職業婦人」のためのアパートが、当時のジェンダー規範のうえに建設された一方で、居住者による日常の実践がジェンダーを組み替えていく可能性をはらむものだったという(影山2004)。

地方出身の未婚者が多数を占めた「職業婦人」は、家族という私的空間で戸主(男)に管理保護される存在ではないうえ、男性によって構成された生産空間にも馴染まなかった。「職業婦人」たちは、男／女、家父長／家父長管理下、公的空間／私的空間、職場／家庭という二元論的な枠組の后者に位置づけられてきた「女性」像に当てはまらない両義的な存在であり、二元論を揺さぶる存在だったのである(影山2004)。

では、空間に反映される二元論は「女性」だけに作用し、「女性」だけを抑圧しているのだろうか？

## 3) 「男性」にとっての空間の意味

日本でジェンダーといえば「女性」のことと見なす傾向はまだまだ強いが、男性をその視点に取り入れようとする意欲的な研究は増えつつある(西川・萩野1999)。日本の地理学における男性研究を牽引する村田陽平は、ステレオタイプ化され、多様性が捨象されてきた男性表象のあり方を問題視し、男性という主体にとってのジェンダー化された空間の意味を、男性学の視点から考察した(村田2000)。

村田(2009)によると、中年シングル男性はシングルであるがゆえに、男性優位の権力装置である公的／私的空間の公的空間において劣位におかれ、中年男性であるという外見ゆえに、女性が占有する私的空間において異質なものとみなされる。つまり中年シングル男性は、公的／私的の二元論によって理想化されたいずれの空間からも疎外されてしまうとい

<sup>7</sup> 地域社会からの蔑視すなわち、地域や社会からの「女工」イメージへの抵抗が、結果として経営家族主義的あるいは家父長制的労働管理を強固にさせ、労働者個人をもそうした制度に迎合させる要因となった(松井2000)との指摘も重要である。

う。したがって、男性優位と語られがちな空間のあり方は、必ずしも男性全体に平等に利益をもたらすものではなく、フェミニスト地理学が問題とするジェンダー化された空間は、男性も疎外していると主張する<sup>8</sup>。

そして、「社会活動を最も効率的に行う空間が構築されてきた結果、中年男性は消費活動の空間でも“生産者”であり続けなければならない、そのような空間では、生産者であることを示すスーツや作業着などを着用していなければ、異端視されてしまう」として、「生産者としての役割を演ずべき中年男性の身体が都市の消費的な空間と必ずしもなじむものではない」こと、「男性優位の権力装置である公的／私的空間という空間の二重性が、男性にとっても居場所を喪失させる抑圧装置となり得ること」を明らかにした(村田2009)。

村田の論考は、日本ではほとんど論じられることのなかった「男性」というジェンダーと空間との関わりに光をあて、男性は公的空間に、女性は私的空間に区分されるという「都市空間のジェンダー化」(影山2004)によって困難を引き受けるのは女性だけに限らないことを鮮やかに切り出した。さらに、男性といえどもその年齢や妻帯の有無などによって得られる資源は大きく異なるため、一枚岩的に男性論を語ることはフェミニズムが闘ってきたはずの抑圧的なジェンダー二元論と同じ轍を踏む暴力的な行為であることを浮き彫りにしてみせた。

放置されてきた「男性の疎外」を取り扱うことで、ジェンダー化された空間を所与とみなすことの危険性を暴いた村田の一連の研究のように、空間構造との関連から「男性」を考察した研究は、欧米・日本いずれにおいてもまだまだ研究の蓄積が少ないため、今後よりいっそうの進展が求められている。

#### IV. 「男性」を構築する差異の空間にむけて

フェミニスト地理学研究において、男性の居場所をめぐる問いは始まったばかりである。II.で見えてきたように、道徳的言説がジェンダーを伴いながら差異の空間をつくることによって、ジェンダーは再生産されていた。この観点からすると、「男性」の意味を強固にする差異の空間を分析する研究が今後さらに必要である。男／女という社会関係の構造をうみだし続けるプロセスと空間・場所との関係において、「男性」はいかに構築されているのか。本章では、これについて全体を振り返りながら、筆者の考えを示したい。

空間的に無視されてきた「女性」の姿を描きだしたフェミニスト地理学は、生産／再生産あるいは公的／私的領域という二元論的知が世界を構成していることを暴きだし、異性愛ヘゲモニーとジェンダーに関わる規範が空間の社会的生産に関与していることを明らかにした。

さらに、空間において疎外され抑圧されるのは男性も同じだという視点も獲得した。男性にとって職業と労働の規範的作用は非常に強く(天野2006)、そこに婚姻の有無も加わって生産者としての男性像が完成する。これは見方を変えれば、村田(2009)も示したように、年齢や婚姻関係の有無などが恣意的な差異指標として機能し、特定の男性から空間における居場所を奪うことに結びつく。

<sup>8</sup> もちろん村田はこの事実によって、男性優位の権力関係そのものを否定するのではないと付記している。

たとえば、扶養者としての男らしさを求める社会的要請は、その期待に応えられなかったという負い目をたえまなく作り出す。このことは、野宿生活に陥った男性たちが共通して抱える苦悩にも現れている(麦倉2006)。稼働能力を問われ続ける男性が、女性に比べて最低限の生存保障からも排除される「ジェンダー化された排除の過程」(丸山2010)が示すように、男性は生産領域の主であることを要求され、女性と子どもをその賃金によって養うことを宿命づけられている。

こうした現実からわかるように、いかなる事情があるにせよ、男性が生産領域から離脱したり、労働を否定したりするようなことをにおわせるのは、ジェンダー規範の上に打ち立てられた社会を脅かす行為として徹底的に非難される。つまり裏を返せば、男性というジェンダーの分析には、規範的な男性像から「逸脱」していると位置づけられ排除される人々や、そうした人々の空間・場所への接近が不可欠だといえよう。

また、そうした空間・場所が、いかなる権力関係のなかにあるのかにも注意する必要がある。生産と男性とを結びつけるジェンダー規範を弱体化させ、社会関係の構造を浸食するような空間・場所は、いかなる法や管理や統制のもとにあるのだろうか。さまざまな主体によって生きられる日常と道徳的言説や法制度が、どのようにして社会的な差異の空間を作り出しているのか。その現実を切り取り、描き出すことが求められる<sup>9</sup>。

構築される差異の空間のイメージが、排除される当事者の自己アイデンティティにもつながるといふ事実を踏まえるならば、こうした研究は、「女のみならず、男をも抑圧する生きにくい世界の構図を析出して、どうであればよいのかを語るための言葉」(丹羽1998)を後押しし、いかに生きるかを考察する一つの手がかりになるものと思われる。

男らしさの既存の形式を支える空間構造を分析し、男らしさの歴史的かつ地理的に特有な形式の地図を描くことは、今後の社会地理学のなすべきテーマでもあるが(丹羽1998b)、この地図に、道徳的言説によって排除される差異の空間を付け加えていくことが、今後のフェミニスト地理学におけるひとつの課題になるのではないだろうか。

## 謝辞

本稿の執筆にあたりご指導いただいた、お茶の水女子大学大学院の石塚道子先生にこの場を借りて御礼申し上げます。また、京都大学の村田陽平氏ほか、お茶の水女子大学大学院の先生と院生、両親と福岡県立大学の堤圭史郎氏に感謝します。本稿の執筆にあたっては、松本大学学術研究助成金を使用しました。

### 参考文献

- 阿部亮吾 2003. フィリピン・パブ空間の形成とエスニシティをめぐる表象の社会的構築-名古屋市栄ウォーク街を事例に-. 人文地理55(4): 1-23.  
天野正子 2006. 「男であること」の戦後史-サラリーマン・企業社会・家族. 阿部恒久・大日方純夫・天野正子編著「男らしさの現代史. 男性史3」. 日本経済評論社: 1-32.  
石塚道子 2010. 終わらない「問い」 「空間・場所・ジェンダー関係」再考. お茶の水地理50: 2-26.  
太田 勇 1990. 女性がいけない日本の地理学会. 地理35(5): 18-20.

<sup>9</sup> 国家権力の統制下に置かれつづけ、そこに集う男性が「ナマケもの」(宮武1923: 2)の逸脱者と表象されがちな空間・場所として賭博場があげられる(寄藤2005)。公営化された賭博の空間と、理想的な「男性」像というジェンダーの関係性については、別稿で記す。

- 太田 勇 1991. “女性の視点”への疑問. 地理36(8): 22-23.
- 太田 勇 1997. 『地域の姿が見える研究を』. 古今書院.
- 荻野美穂 2002. 『ジェンダー化される身体』勁草書房.
- 影山穂波 1998. ジェンダーの視点から見た港北ニュータウンにおける居住空間の形成. 地理学評論71: 639-660.
- 影山穂波 2000. 1930年代におけるジェンダー化された空間-同潤会大塚女子アパート-. 人文地理52(4): 1-20.
- 影山穂波 2002. 特設レポート ジェンダー. 人文地理54(3): 72-78.
- 影山穂波 2004. 『都市空間とジェンダー』. 古今書院.
- 影山穂波 2006. フェミニスト地理学-ジェンダー概念と地理学. 加藤政洋・大城直樹編著『都市空間の地理学』ミネルヴァ書房: 251-262.
- 木村オリエ 2008. 都市空間をめぐるジェンダー地理学の視点と課題-英語圏諸国と日本の研究動向の検討を通じて-. 人間文化創成科学論叢11: 431-439.
- ギル, T. 1999. 寄せ場の男たち-会社・結婚なしの生活者. 西川祐子・荻野美穂編著『共同研究 男性論』. 人文書院: 17-43.
- 熊谷圭知 1991. 「男性優位」の地理学に必要な女性の視点. 地理36(12): 14-16.
- コンネル, R. W. 著, 多賀 太訳2008. 『ジェンダー学の最前線』世界思想社. Connell, R. W. 2002. *GENDER*. Cambridge: Polity Press.
- ジャクソン, P. 著, 丹羽弘一訳1998. 男らしさの文化のポリティクス-一つの社会地理学にむけて-. 空間・社会・地理思想3: 110-127. Jackson, P. 1991. The Cultural Politics of Masculinity: Towards a Social Geography. *Transaction*. N.S.16: 199-213.
- スコット, W. J. 著, 荻野美穂訳1992. 『ジェンダーと歴史学』平凡社. Scott, W. J. 1988. *Gender and the Politics of History*. Columbia University Press.
- 関村(木村)オリエ 2009. 郊外コミュニティにおける定年退職男性の「男性性」再構築-ライフストーリーからの考察-. 人間文化創成科学論叢12: 335-344.
- 関村(木村)オリエ 2010. ジェンダーの視点からみた都市郊外空間の変容と地域への住民参加. お茶の水地理50: 137-142.
- 竹内啓一 1980. ラディカル地理学運動と「ラディカル地理学」. 人文地理32(5): 44-67.
- 西川祐子・荻野美穂編著1999. 『共同研究 男性論』人文書院.
- 丹羽弘一 1992. 男性の視点は可能か?. 地理37(10): 78-80.
- 丹羽弘一 1998a. ジェンダーの風景、知、そして第三の場所. 荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ-地理学的想像力の探求』古今書院: 162-174.
- 丹羽弘一 1998b. 解題-あるいはこの場を借りた一試論. 空間・社会・地理思想3: 126-127.
- ノックス, P. ・ピンチ, S. 著, 川口太郎・神谷浩夫・高野誠二訳 2005. 新版 都市社会地理学. 古今書院. Knox, P. and Pinch, S. 2000. *Urban Social Geography: An Introduction*, 4th ed. Prentice Hall.
- パトラー, J. 著, 竹村和子訳1999. 『ジェンダー・トラブル-フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社. Butler, J. 1990. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York and London: Routledge.
- ハバード, P. 著, 神谷浩夫訳2002. セクシュアリティ, 不道德, および都市: 赤線地区と街娼の底辺化. 神谷浩夫監編訳『ジェンダーの地理学』古今書院: 118-150. Hubbard, P. 1998. Sexuality, immorality and the city: red-light districts and the marginalization of female street prostitutes. *Gender, Place and Culture* 5 (1): 11-23.
- バレンタイン, G. 著, 福田珠己訳1998. (異)性愛化した空間-日常空間に対するレズビアンのか覚と経験. 空間・社会・地理思想 3: 77-95. Valentine, G. 1993. (Hetero) sexing space: Lesbian perception and experiences of everyday spaces. *Environment and Planning D Society and Space* 11: 395-413.
- ピルチャー, J. ・ウィラハン, I. 著, 片山亜紀訳2009. 『ジェンダー・スタディーズ』. 新曜社. Pilcher, J. and Whelehan, I. 2004. *Fifty Key Concepts in Gender Studies*. London: Sage Publications.
- フリーダン, B. 著, 三浦富美子訳 2004. 『新しい女性の創造』大和書房. Friedan, B. 1977. *THE FEIMNINE MYSTIQUE*. New York: Curtis Brown.
- マクドウェル, L. 著, 吉田容子訳 1998a. 空間・場所・ジェンダー関係: 第1部-フェミニスト経験主義と社会的関係についての地理学-. 空間・社会・地理思想3: 28-46. McDowell, L. 1993a. Space, place and gender relations Part 1: Feminist empiricism and the geography of social relations. *Progress in Human Geography* 17 (2): 157-179.
- マクドウェル, L. 著, 影山穂波訳1998b. 空間・場所・ジェンダー関係: 第2部-アイデンティティ, 差異, フェミニスト幾何学と地理学-. 空間・社会・地理思想3: 47-59. McDowell, L. 1993b. Space, place and gender relations Part 2: Identity, difference, feminist geometries and geographies. *Progress in Human*

*Geography*17 (3): 303-318.

- 松井美枝 2000. 紡績工場の女性寄宿労働者と地域社会との関わり. *人文地理*52(5): 59-73.
- マッシィ, D. 著, 富樫幸一・松橋公治訳2000. 『空間的分業-イギリス経済社会のリストラクチャリング-』古今書院. Massey, D. 1995. *Spatial Divisions of Labour: Social structures and the geography of production*, 2nd ed. Macmillan.
- 丸山里美 2010. ジェンダー化された排除の過程-女性ホームレスという問題-. 青木秀雄編著『ホームレス・スタディーズ-排除と包摂のリアリティ』ミネルヴァ書房: 202-232.
- 宮武外骨1923. 『賭博史』. 半狂堂.
- ミレット, K. 著, 藤枝滯子ほか訳 1991. 『性の政治学』ドメス出版. Millet, K. 1970. *SEXUAL POLITICS*. New York: Doubleday & Company.
- 麦倉哲 2006. 男らしさとホームレス. 阿部恒久・大日方純夫・天野正子編著『男らしさの現代史. 男性史3』. 日本経済評論社: 92-123.
- 村田陽平 2000. 中年シングル男性を疎外する場所. *人文地理*52(6): 1-19.
- 村田陽平 2009. 『空間の男性学-ジェンダー地理学の再構築-』京都大学学術出版会.
- モンク, J.・ハンソン, S.著, 影山穂波訳2002. 人文地理学において人類の半分を排除しないために. 神谷浩夫監編訳『ジェンダーの地理学』古今書院: 2-19. Monk, J. and Hanson, S. 1982. On not excluding half of the human in geography. *Professional Geographer* 34: 11-23.
- 吉田容子 1996. 欧米におけるフェミニズム地理学の展開. *地理学評論*69: 242-262.
- 吉田容子 2002. 男性主義的な空間への一批判 -日本の大都市郊外ニュータウンを事例として-. 奈良女子大学文学部研究年報46: 73-89.
- 吉田容子 2004. ジェンダー研究と地理学. 水内俊雄編『空間の社会地理 シリーズ人文地理学5』朝倉書店: 59-79.
- 吉田容子 2006. 地理学におけるジェンダー研究-空間に潜むジェンダー関係への着目. *E-journal GEO1*: 22-29.
- 吉田容子 2010. 米軍施設と周辺歓楽街をめぐる地域社会の対応-「奈良PRセンター」の場合-. *地理科学*65(4): 1-21.
- 寄藤晶子 2005. 愛知県常滑市における「ギャンブル空間」の形成. *人文地理*57(2): 5-26.
- ローズ, G. 著, 吉田容子ほか訳 2001『フェミニズムと地理学-地理学的知の限界』地人書房. Rose, G. 1993. *Feminism and Geography: The limit of geographical knowledge*. Cambridge: Polity Press.
- Cresswell, T. 1997. Book Reviews: Geographies of Exclusion. *Annals of the Association of American Geographers* 3 (87): 566-567.
- Hanson, S. and Pratt, G. 1995. *Gender, Work, and Space*. New York: Routledge.
- Jackson, P. 2005. *Cultural Geography: A Critical Dictionary of Key Concepts*, London, New York: I.B.TAURIS.
- Johnston, R.J., Gregory, D. and Smith, D.M. eds. 1994. *The dictionary of human geography*, 3rd ed. Oxford: Blackwell Publishers.
- Matless, D. 2009. moral geography. *The dictionary of human geography, 5th.ed.* Blackwell Publishing: 478-479
- Monk, J. 1992. Gender in the landscape: expressions of power and meaning. *Inventing Places: Studies in cultural geography*. Melbourne: Longman Cheshire: 123-138.
- Ortner, S. B. 1996. *Making Gender: The Politics and Erotics of Culture*. Boston: Beacon Press
- Pratt, G. 2000. Feminist geographies. *The dictionary of human geography*, 4th ed. Blackwell Publishers: 259-262.
- Sibley, D. 1992. Outsiders in society and space. *Inventing Places: Studies in cultural geography*. Melbourne: Longman Cheshire: 107-122.
- Sibley, D. 1995. *Geographies of Exclusion; Society and Difference in the West*. London and New York: Routledge.